



テープカット

## — 日本の美 — 熱海美術館名品展を終えて

外間 正幸

このたび—日本の美—救世熱海美術館名品展が、救世熱海美術館と琉球新報社、沖縄県立博物館の三者の主催で、去る1月12日から2月3日まで当博物館で開催され、予想以上の大盛況を呈し、無事に、かつ、好評裡に終了できたことは誠に喜びにたえません。

今回の催しは、沖縄の一般の人々や学生、児童生徒が、日本の美術工芸の名品の実物を観る機会に恵まれていないので、是非日本の美術展を催して日本の美術工芸を理解させたいとの趣旨で行われ、同時に沖縄の美術工芸品も展示して、両方展観させることによって、日本と沖縄の美の精華が充分に鑑賞されるよう沖縄県立博物館の名品展も併催されました。

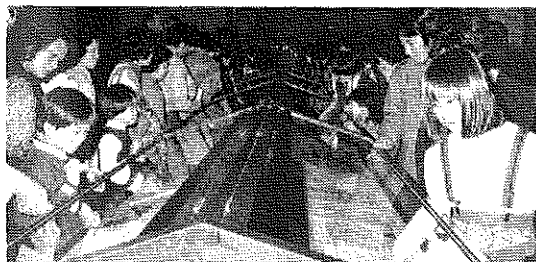
展示品は後述のごとくまたと観られない優れたものばかりであり、特に国宝の野々村仁清作「色絵藤花文茶壺」や葛飾北斎、安藤広重筆の版画等は美術愛好家や児童生徒たちに感銘を与え、一方、国の重文の「おもしろさうし」や県の文化財の「聞得大君御殿雲龍黄金簪」等も多くの観客を魅しました。

このように立派な美術展を催すことができたのも、ひとえに救世熱海美術館の御尽力の賜物と感謝し、同時に琉球新報社並びに御後援下さった文化庁はじめ諸団体、それに御協力頂いた日本航空、その他関係者各位にも心から感謝と御礼を申し上げる次第であります。

## 好評を博した「日本の美—救世熱海美術館名品展」

年明け早々の1月12日(土)から2月3日(日)までの23日間、当博物館において「日本の美—救世熱海美術館名品展」(救世熱海美術館、琉球新報社と三者共催)が開催された。救世熱海美術館は、昭和32年に創立者岡田茂吉氏のコレクションを公開するため静岡県熱海市に開設されたもので、日本、中国をはじめとする東洋の美術品2千余点を収蔵している。今回の展示会においてはその中から国宝1点、重要文化財9点、重要美術品17点を含む百余点の作品が選ばれ、展示された。

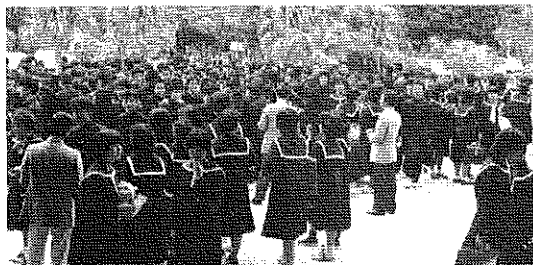
展示は絵画、書跡、彫刻、陶磁器、漆器、金工からなり、時代的にも縄文式土器から近代日本画までとは幅広く、いわば日本美術史の概略がわかる内容となった。会場は3つに分かれ、第1会場では屏風絵、近代日本画、浮世絵、第2会場では土器、埴輪、陶磁器、漆器、金工、第3会場では絵画、書跡、仏像彫刻、そして国宝の野々村仁清作「色絵藤花文茶壺」が展示された。



評判を呼んだ浮世絵版画コーナー

開幕してからは、平日は学校の団体見学で会場が埋まり、土、日、祝祭日は家族連れで賑わった。第1会場では屏風絵や竹内栖鳳の「翠竹野雀図」、上村松園の「虫の音図」、北斎の「富嶽三十六景」、広重の「東海道五十三次」などが人目をひき、第2会場では縄文土器甕や埴輪が子どもたちの人気をさらい、第3会場では「藤壺」や康俊作「聖徳太子立像」の前に人垣ができた。一方では時間をかけて作品のひとつひとつをじっくり鑑賞する人の姿も見うけられた。

当館ではこの名品展と合わせて「沖縄県立博物館名品展」を特別展示室で開催した。絵画、書跡、彫刻、三味線、陶磁器、染織など重要文化財、県指定文化財を含む当館の優品百余点を展示したが、



団体見学でにぎわう

見学者からは、日本と沖縄の伝統的な美術工芸を比較して見る事ができるとして好評で、なかには沖縄の美術工芸の水準の高さに感動したという人もいた。

また、開幕初日の1月12日には、元京都国立博物館長で文化財保護審議委員の松下隆章先生をお招きして「日本美術の特性—救世熱海美術館の名品にふれて」と題する記念講演会を開催した。会場の講堂には百数十名の美術愛好家がつめかけ、平易でしかも内容の濃い先生の講演に聞き入った。翌1月13日からホールでは連日映写会が開かれた。時間は午後2時から4時まで。日本、沖縄の美術工芸、戦前の沖縄を撮したフィルム、「ループル美術館」、「博物館」など展示会と内容的につながらるフィルム約40本を順次上映したが、こちらもなかなか好評で、映写会に通う人も出たほどである。

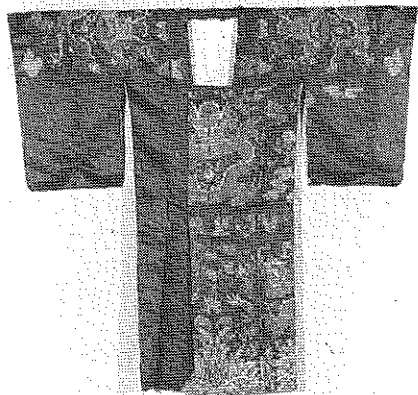
さらに2階ロビーでは、会期中華道山月流によるいけばな展が催され、また前庭では茶道裏千家淡交会沖縄支部、表千家同門会沖縄県支部による協賛茶席が土・日・祝祭日に設けられた。

23日間の会期中に訪れた観客数は76,373人。いかにこの種の展示会が沖縄で少ないか、いかにこの種の展示会が切望されているかを示す数字である。実際アンケートを見ても「教科書や写真でしか見られなかった美術工芸品を眼のあたりに見て感動した」、「この種の展示会を毎年開いてほしい」、次回は「ヨーロッパ美術展」を、あるいは「東洋の美」展をといた感想や注文が数多く寄せられた。見学者が多くて落ちついて鑑賞ができない、もっと多くの作品を展示してほしいといった不満もあったが、今回の展示会の反省をもとにさらにすばらしい特別展を企画したい。

## 〈新資料紹介〉

### 赤絵葡萄文急須

#### 井伊文子氏所蔵の漆器・織物類の寄贈品



りゅうずいりゅうんせいかたつなみ もんからおり いししょう  
龍瑞雲青海立波文唐織衣裳

昭和54年12月1日と今年1月24日の2回にわたって、彦根市長井伊直愛氏夫人文子氏より同氏所蔵の漆器5点、織物（帯、裂地を含む）12点、紅型裂地1点の寄贈があった。井伊文子氏は琉球王家尚家の直系にあたる人で、昭和12年に井伊家に嫁いだ。今回寄贈を受けた資料はいずれもそのとき尚家からもらった品である。

漆器のなかには「朱漆鳳凰瑞雲箔絵小櫃」（王国時代末期の作か）、「黒漆三ツ巴紋桜花時絵文庫」、「朱漆三ツ巴紋螺鈿大文庫」（いずれも大正末期一昭和初期の作品か）など、いずれも旧王家の長女にふさわしい嫁入り道具で、気品にあふれるまのが含まれている。また織物には、王国時代に中国皇帝から下賜された「龍瑞雲青海立浪文唐織衣裳」を仕立て直した着物や、王国時代末期に織られた久米島紬（御用布）、大正末期、昭和初期に織られたと見られる芭蕉布緋、宮古上布の優品が入っている。出所がはっきりしていて、しかもそれが旧王家だということ、年代推定が可能だということ、そして優品が多いということ、これらの点からして寄贈された資料は展示の充実はいうに及ばず、今後の漆器、織物研究にも大いに貢献するであろう。

なお、井伊文子氏は「伝桑華の会」の会長として沖縄の社会事業に打ち込む一方で和歌も詠まれ、その道でも知られた人である。

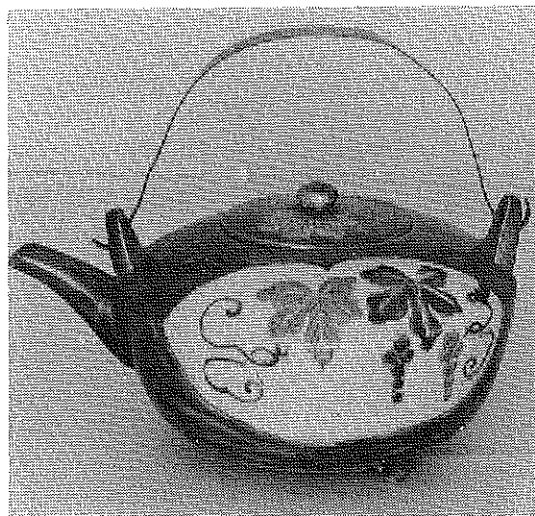
沖縄の陶器のなかで赤絵は上手物の代表として珍重された。そして、これらの赤絵の作品は首里、那覇の上流家庭でしか使用されず、地方では稀に豪農とか指導者的な地位にある人たちが使っていたと思われるほどその数は少ない。

この「赤絵葡萄文急須」は気品に満ち溢れ、当時の生活のゆかしさがしのばれる。このような赤絵急須にお茶をいれて飲んだ人々の生活がどんなに心豊かで平和な時代であったか、次ぎ次ぎと楽しい想像をめぐらすことが出来る。

この作品は暖かみのある白化粧の上に描いた赤絵葡萄文がしっかりと落着いて美しい。かつて柳宗悦は沖縄の赤絵のすばらしさについて、中国の宋赤絵を例に出して絶讃したことがある。

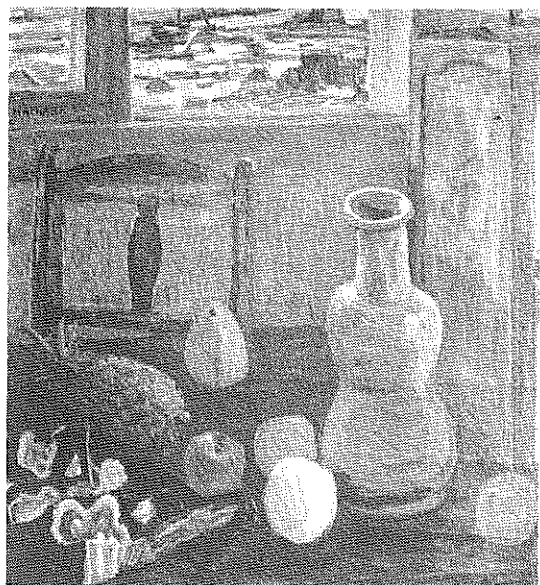
急須全体に緑釉を施し、窓絵に葡萄を描いてあるが、葡萄の葉の1枚を黄色で、あと1枚を青、葡萄の実を渋味のある朱と他を黄色で塗り分けている。蔓を青で、また蓋に描かれた葉を黄色、蔓を青というように工夫して彩色されている。

急須の形もふっくらとしていて、おおらかさと暖かさが感じられる。なお、当館にはこの他に「赤絵山水文急須」があるが、この作品と形、絵付け共によく似たものである。



赤絵葡萄文急須 19世紀 壺屋焼  
高さ11.0cm、口径7.0cm

# 南風原朝光 遺作二人展開催される



窓際の静物 南風原朝光氏作

近代沖縄画壇の先駆者であり、中央画壇でも活躍した南風原朝光(1904~1962)、名渡山愛順(1906~1971)両画伯の遺作二人展(会期 昭和54年11月20日~12月2日、会場 特別展示室)が当館主催、沖縄タイムス社、琉球新報社後援で開催された。

両画伯は昭和4年、那覇市内のデパート円山号で二人展を開催してから今回の遺作展開催まで実に50年の歳月が流れている。

現在、県では総合文化センター構想のなかに美術館建設が盛り込まれ、最終答申を受けて目下その準備が進められている。

と同時に、今日の沖縄画壇の隆盛をみるにつけ、両画伯の先駆者としての足跡の大きさを痛感せざるを得ない。

そこで、両画伯の代表作を一堂に展示公開することは、ただ単に両画伯の偉業を偲ぶだけではなく、後進への激励と指標を与え、今後、県下の美術活動がますます充実発展することを願ってこの特別展が企画された。

出品作は、南風原朝光の風景、静物画と名渡山愛順の琉舞や琉装の婦人像などを中心に展示構成した。

また、両画伯は制作活動以外に琉球古典舞踊や文化財の保護育成等にも人一倍情熱を傾注した共通点もあり、たえず若い人々に沖縄文化のすばらしさと誇りを与えたことも見逃せない。

なお、同展開催にあたっては御遺族をはじめ、ご協力いただいた準備委員の方々に厚くお礼申上げたい。

## ★南風原朝光 主なる画歴

1. 1931年 白日会賞受賞
2. 1938年 藤田嗣治他沖縄へ案内する
3. 1942年 第一回台日文化賞受賞
4. 1943年 国画会賞受賞
5. 1948年 国画会会員となる。

## ★名渡山愛順 主なる画歴

1. 1930年 那覇で「泰西名画模写展」(個展)を開らく。
2. 1941年 光風会展で三星賞受賞
3. 1940年 第三回文部省美術展へ「琉球古典調」出品。
4. 1946年 光風会会員となる
5. 1966年 第52回光風会展へ「乙樽の図」出品。



沖縄情趣 名渡山愛順作

# 久米島で第1回移動博物館開かれる

昭和55年2月27日(水)から3月1日(木)までの日間、久米島の具志川村、仲里村両教育委員会共催で第1回移動博物館を開催した。内容は展示会、講演会(文化講座)、映写会の組み合わせで、展示会は、鎌倉芳太郎氏が大正末期から昭和初期にかけて撮影した写真(サントリー美術館寄贈)をとする戦前の沖縄の写真と沖縄の天然記念物の動物写真を中心とし、琉球王府から久米島へ送られた久米島紬の図案11枚、図案に合わせてつくられた紬の裂地1点を加えた。

また、講演会は、名嘉正八郎副館長の「沖縄の」と大城逸朗主任学芸員による「久米島の生い」とし、映写会は、昭和10年代の沖縄を写したフィルム3本に沖縄の蝶やトンボの生態を紹介した映画2本で構成した。

キビ刈り時期にかち合ったため、一般の見学者が多くなかったが、それでも年輩の人や婦人、公員、会社員などが訪れ、熱心に展示品に見入っていた。また、展示会場には、久米島のほとんど

の小中学校生が見学に来た。低学年の子どもたちは、天然記念物の動物写真に関心を示すのが多かったが、高学年、中学生には戦前の沖縄の写真も好評で、なかには久米島紬の図案と裂地が一番印象深かったと答える生徒もいた。

実物をもっと多く見せてほしい、毎年でも開いてほしいという要望が多かった。博物館の現状ではかなり難しい課題となるが、他の関係機関とも提携して要望にできるだけ沿うようにしたい。



仲里村の会場風景

## 資料寄贈者御芳名

伊文子氏(滋賀県)  
戸直氏(那覇市)  
坂千代氏(東京都)  
宮正治氏(北谷村)  
藤勝一氏(京都市)  
波あさ子氏(那覇市)  
名ナビ氏(那覇市)  
山政敏氏(東京都)  
川洋氏(京都市)  
幸津留子氏(那覇市)  
安名常和氏(那覇市)  
玉橋朝史氏(那覇市)  
佐真一氏(那覇市)  
島 格氏(熊本県)  
々々孝志氏(長野県)  
浜真昌氏(那覇市)  
添市史編集室  
吉郎氏(鳥取県)  
田茂郎氏(京都市)  
六鷗氏(静岡市)

沖縄タイムス社  
当間嗣起氏(那覇市)  
仲地利子氏(那覇市)  
池原元秀氏(那覇市)  
海洋博公園沖縄館  
北九州市立自然史博物館  
下謝名松栄氏(浦添市)  
与那覇豊政氏(那覇市)  
伊江村教育委員会  
ニコライ、クラマレンコ氏(ソ連)  
奥田朝造氏(大阪市)  
凡地学研究所  
名渡山愛擴氏(那覇市)  
中川伊作氏(京都市)  
宮城安秀氏(東京都)  
救世熱海美術館  
ジョージHケアー氏(ハワイ)  
パールヒ・ブラウン氏(ハワイ)  
嘉教栄二氏(浦添市)  
花城清光氏(那覇市)

本舩真加良氏(与那国町)  
根本長昭氏(与那国町)  
比屋定弘氏(竹富町)  
波照間トヨ氏(豊見城村)  
安村文氏(那覇市)  
安次富長昭氏(那覇市)  
比嘉稔氏(中城村)  
阿賀嶺良雄氏(宮崎市)  
中井勇治氏(那覇市)  
貝敷文雄氏(竹富町)  
糸数盛栄氏(石垣市)  
東里哲三氏(竹富町)  
上江洲智道氏(那覇市)  
与那覇清友氏(那覇市)  
知念善吉氏(佐敷村)  
宮城茂敏氏(大里村)  
奥間キミ子氏(嘉手納町)  
又吉誠仁氏(大阪市)  
久手堅実氏(具志川村)

## 昭和55年度特別展案内

〈特別展〉 (◎は当館主催)

### ◎新収蔵品展

5月9日(金)～5月22日(木)

### ○琉大・沖大・沖国大3大学美術クラブ展

6月24日(火)～6月29日(日)

(三大学美術クラブ)

### ○国・県指定文化財 天然記念物展

7月12日(土)～7月24日(木)

(沖縄県教育委員会)

### ◎琉球列島のシダ植物展

8月1日(金)～9月14日(日)

### ○中国水墨画5人展

9月17日(水)～9月25日(木)

### ○安次富長昭「抽象への展開」展

10月5日(日)～10月15日(水)

### ◎失われた生物たち一大恐竜展——

11月1日(土)～11月30日(日)

### ◎義村朝義展

昭和56年1月10日(土)～1月25日(日)

### ◎渡名喜島展

2月3日(火)～2月22日(日)

### ○首里高校染織デザイン科卒業作品展

2月26日(木)～3月1日(日)

## 第2回移動博物館

会期 昭和55年5月16日(金)～5月18日(日)

会場 今帰仁村中央公民館

展示会 沖縄陶器名品展・戦前の沖縄写真展・沖縄の天然記念物の動物写真展

文化講座……5月17日(土)午後5時～7時  
大城逸朗(当館学芸員) 山原のおいたち  
宮城篤正(当館学芸員) 沖縄の陶器

映写会……会期中毎日10時・2時・4時

### 「沖縄県立博物館友の会」入会案内

今年1月「友の会」が結成され、本格的な活動が始まっています。

会員には普通会員、準会員、賛助会員の三種類があります。会員は博物館へ無料または割引で入館できる等の特典があります。

入会手続などについては直接博物館にお問い合わせ下さい。

## 昭和55年度博物館文化講座

時間 ▶午後2時30分～4時30分

会場 ▶当館講堂または特別展示室

4月26日(土) 外国の博物館をめぐって

琉球大学教授 野原朝秀

5月24日(土) 紅型の世界

博物館学芸員 渡名喜明

6月28日(土) 南極のはなし

琉球大学教授 木崎甲子郎

7月26日(土) 島うたのはなし

島うた研究会 仲宗根幸市

8月17日(日) 博物館で描こう

沖縄キリスト教短期大学講師 儀間朝健

8月30日(土) 琉球のシダ植物

読谷高校教諭 島袋守成

9月7日(日) 南部の史跡めぐり

博物館学芸員 知念 勇

9月27日(土) 首里の織物

琉球大学教授 大城志津子

12月20日(土) 戦後沖縄画壇のあゆみ

琉球大学講師 仲井間憲児

1月31日(土) 沖縄近代史の人物群像

琉球大学助教授 比屋根照夫

2月21日(土) 考古学よりみた渡名喜島

教育庁文化課 当真嗣一

3月28日(土) 本土出かせぎ移住について

沖縄国際大学助教授 石原昌家

## 特別講演会

11月1日(土)

### ◎琉球の自然と自然史博物館

北九州自然史博物館副館長

大田 正道

### ◎日本の古脊椎動物と琉球列島

横浜国立大学教授 長谷川善和

時間 午後2時30分～4時30分

会場 沖縄教育センターホール

### 沖縄県立博物館だより No.8

発行年月日 昭和55年3月31日

編集・発行 沖縄県立博物館

住所 〒903 那覇市首里大甲町1の1

TEL 0988-86-4353

84-2243